保育現場で使用される楽器の基本的な取り扱い方と、子どもへの働きかけについて

河原田　　潤

キーワード／保育現場で使用される楽器とその扱い方・子どもへの働きかけ

1．はじめに

現在、幼稚園教育要領の中で「音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。」とあり、また保育所保育指針でも、四歳児については「友達と一緒に音楽を聴いたり、歌ったり、体を動かしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ。」、五歳児については「音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色の美しさやリズムの楽しさを味わう。」とあることから、近年保育現場では、一年の中で大きな行事である「発表会」において、特に年中、年長では様々な楽器を使った「合奏」を重点的に行うことが多くなってきている。

しかし保育現場では、楽器の演奏の仕方や正しい取り扱い方が周知されておらず、その楽器の持つ本来の音色を得られず仕舞いなことがあったり、楽器を壊してしまいその寿命を減らしてしまったりということが多いようだ。

実際筆者は保育現場で使用される楽器を授業で扱い、その使用方法から演奏方法までを楽しみながら確認し合うように心掛けているが、ここ２年間で行っている幼稚園教諭に関する教員免許更新講習においてもこの件を取り上げたところ、かなりの反応があり保育現場での関心度の高さを強く感じた。

そこで、今回保育現場で使用される一般的な楽器の基本的な取り扱い方を改めて具体的に確認し、その一部について子どもにもどう働きかけていくかを考察していきたいと思う。

2．保育現場で使用される主な楽器

（1）大太鼓（バスドラム）

二つの図は、スタンド式の大太鼓をセットしたものである。本来は、奏者が音色作りのために、右の面と左の面の張力を変えてチューニングをするが、どちらの面をたたくかを常に理解できるように、ラベルを上側にしたり、側面の空気穴のある方を正面に構えたり等の調節をする。

チューニングの例としては、奏者が右利きの場合、それぞれの面を任意で一定の音程にするが、楽器右面を強めに張り、左面をやや緩めに張る。

本体を持ち運ぶ際には、わくを持って運ぶようにする。金具の部分を持って運ぶことは避けるようにする。

＜図１＞

＜図２＞

【子どもへの働きかけについて】

演奏する時は楽器後ろ正面に立ち、余韻を止めるために、たたく面と違う面を触れて余韻を止めるが、この時余韻を止める手はバチを持たない手で止める。しかし、使用する大太鼓の直径が大きくて（又は体の小さな子どもの場合）たたく面と違う面に届かない場合は、たたく面と同じ面を、バチを持たない手で止めさせるのが良いだろう。この時は楽器のやや斜め後ろに立たせるとさらに演奏が容易に出来るであろう。

（２）小太鼓（スネアドラム）

・スティック

スティックの持ち方には順手・逆手とあるが、子どもが扱うには順手で持つのが自然であろう。正式にはスティックを腕の延長線になるように持つ。＜図３＞＜図４＞

・本体

小太鼓本体をスタンドにセットする際、スティックを順手に持つ場合は、水平にセットして構わない。スティックを逆手に持って構える場合は、本体を斜めにセットする場合もあるが、むしろ水平にした方が、安定したたたき方が出来るようである。＜図５＞

・響き線

張りのある音色を出すために、小太鼓は響き線を張った状態で演奏するが、本体の側面には、＜図６＞のような響き線を張るレバーが必ず付いている。演奏する場合以外は図のように外しておくようにする。

ちなみに、響き線を外した小太鼓の音色も、和太鼓のような音色が得られるので、状況に応じた音色の使い分けをすると面白いだろう。

＜図３＞

＜図４＞

＜図５＞

＜図６＞

【子どもへの働きかけについて】

この楽器は基本的に大太鼓とコンビになり、主に大太鼓が強拍で小太鼓が弱拍を担当することになるが、弱拍を感じることは子どもにとって中々難しいことから、音楽を得意としている子ども、あるいはピアノ等音楽的訓練を日頃から受けている子どもが担当することが多いであろう。しかし、両手にスティックを持った演奏が難しい場合は、しっかりとした拍を感じられるように、スティックを片手だけに持って演奏することもやむを得ないと考える。

（3）タンバリン

タンバリンについては、特に持ち方を注意したい。この楽器の側面には、丸い穴が開いた箇所が必ず一箇所あるわけだが、正式には＜図７＞→＜図８＞のように中指を穴に通し親指で挟み、支えるように持つ。子どもに限らず、丸い穴に親指を通して持ち構えてしまいがちだが、これは親指を折ってしまう恐れがあるので絶対に避けたい。

＜図７＞

＜図８＞

中指が通らない場合は無理をせず、親指とその他の指で挟むように持ち構える。
＜図９＞→＜図10＞→＜図11＞

＜図９＞

＜図10＞

＜図11＞

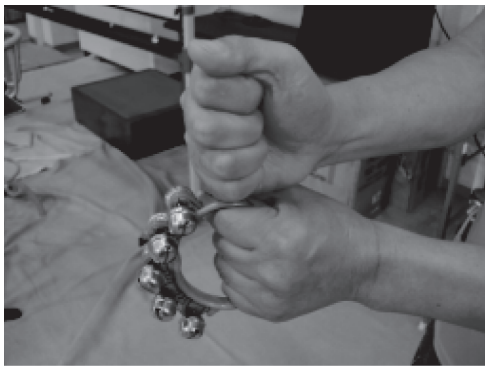
【子どもへの働きかけについて】

子どもへの働きかけについては前述の通りであるが、子どもに対し穴に中指を通させることにはやはり抵抗があることから、楽器がふらつかない、楽器を落とさない程度に支えて構えさせることが良いと考える。

また演奏する場合は手拍子をするように両手で迎えに行かないで、楽器を持つ手は固定して動かさず、演奏する手のみを動かして拍を取ることに心掛けさせたい。両手で迎えに行くより、動作を行う手が一方だけの方がより正確に拍を取ることが出来ると考えられるからである。

（4）すず

＜図12＞



＜図13＞

すずについては、たたく手は＜図12＞の部分で、＜図13＞のように、できるだけ本体の発音体に近い場所をたたいて鳴らすのが好ましい。

また、ただ片手にすずを持って、上下に振って音を出すやり方も正しいが、音が止められずにリズムを感じられない場合もあるので、おおむね図のように演奏することがお勧めである。

【子どもへの働きかけについて】

子どもに演奏させる場合に本体を握ってしまったり、強くたたいてしまって、たたく手の場所によっては自身の手を痛めてしまうことも考えられるので、若干親指の下辺りの柔らかい部分をたたかせたりして、楽器の性能を失わない範囲の中で最大限配慮することが重要と考える。

（5）シンバル

ここでは、「併せシンバル」の場合について取り上げる。

シンバルを構える際には、シンバル本体から出ているひもに手を通して、本体を支えて音を出す訳であるが、基本的なひもを持ってからの構えは＜図14＞→＜図16＞になる。

しかし、手の小さな子どもに関しては、ひもが若干余ってしまう事が多いので、＜図15＞→＜図16＞のようにある程度手に絡ませて構えさせると良いだろう。

＜図14＞

＜図15＞

＜図16＞

＜図17＞

ちなみに＜図16＞の構えは、このシンバルのゲージ（直径）が大きくて重たいため、やや斜めにして構えているが、普段子どもが使うシンバルはゲージが小さく軽めに出来ているので、真っ直ぐ縦にして構えると合わせ易くなるだろう。

また、床、テーブル等に置く場合は、余計な音が出てしまうのを避けるため、出来れば柔らかい布等の上に＜図17＞のように置くのが好ましい。

【子どもへの働きかけについて】

この楽器は大きな音がするばかりでなく動作が大きく見えるため、子どもはシンバルを持つとすぐ叩きたがり、音色も雑になりがちである。そこである程度保育者が付き添って＜図16＞の構えから確実に「併せる」ことをまず子どもに覚えさせ、そこから徐々に動作を大きくして音も大きくしていくのが良いかもしれない。

（6）トライアングル

トライアングルに関しては、楽器の構え方が子どもにとってはかなり難しく、取り扱いしづらい楽器の一つであるが、最近保育現場ならびに幼児用に、スタンド付きのものが出回ってきており、大分子どもが扱い易くなっている。

なぜ扱いづらいのかというと、ひもがグラグラして本体が固定できずにたたきづらいことである。豊かで澄んだ音色を保つためには、できるだけ本体に触らずに本体を固定する必要があり、適切なひもの長さも重要なポイントになってくる。＜図18＞は典型的な一つの例だが、子どもに持たせる場合には、この持ち方を応用して考えることが必要であろう。＜図19＞のように、クリップを付けて他のスタンド等にぶら下げる方法もある。

＜図18＞

＜図19＞

＜図20＞

＜図21＞

次にスティックでたたく場所についてであるが、＜図20＞＜図21＞のように二通りある。子どもがたたき易い方で構わないが＜図21＞の、本体の肩辺りをたたく方が、子どもにとっては容易であるかもしれない。

また、トライアングルには、三角形が途切れている箇所が一箇所必ずあるが、構えた時、スティックを持った手ではない方向に途切れている箇所が来るようにする。（右手でスティックを持ったら、左の方向に途切れている箇所が来るようにする。）

【子どもへの働きかけについて】

前述のように、楽器の構えが子どもにとって難しいと考えられることから、基本的に保育

者が子どもに付き添って、構えを確認してから叩かせるのが良いだろう。また、楽器を構える高さも＜図19＞＜図21＞のような高さを基本とするが、子どもにとっては目線の高さまで上げて構えると合奏で合わせ易くなるかもしれない。

（7）木琴・鉄琴類

木琴・鉄琴類に関しては、「ばち」のことを「マレット」という。マレットの持ち方は、正式には＜図22＞＜図23＞のようにハの字になるように構える。紛らわしくなるが、腕の延長線上で持つ小太鼓のスティックの持ち方とは違うので注意したい。鍵盤をたたく場所も、基本的に鍵盤の真ん中をたたくのが好ましい。

＜図22＞

＜図23＞

【子どもへの働きかけについて】

鍵盤楽器については、ピアノ等の心得がある子ども（つまり鍵盤の並びが判る子ども）が担当すると円滑に進むであろう。しかし、マレットを２本同時に操ることは中々困難な場合が多いので、単旋律を１本のマレットで演奏するのもやむを得ないと考える。

また、シール等、目印になるものを鍵盤上に貼り付けて、それを目安に子どもに演奏させることについては賛否両論あるが、数が多すぎて派手になり過ぎない程度に、且つ子どもが叩く箇所の目安になるように程度の配慮は問題ないと思われる。

（8）カスタネット

年少時より、リズム遊び等、身近に手軽に演奏出来るうえ、比較的安価なため、最も親しみ易い楽器の一つである。

この楽器を用いる際に、子どもに心掛けさせたいのは、「予動（よどう）」である。「予動」とは、「予備の動作」という意味である。

この「予動」は、演奏する動作とはっきり分けて行い、その動作の違いから子どもにリズム感をよりはっきりと理解させることにつながるであろう。

＜図24＞

＜図25＞

本来は、＜図24＞の予動から＜図25＞のように演奏することになるが、前述した通り、「予動」は、はっきりと違う動作を行ったほうが、子どもの理解を得られ易いと考えられるので、

＜図26＞

＜図27＞

＜図26＞のように「予動」を行うことが、初歩的な段階では良いだろう。

【子どもへの働きかけについて】

リズムを正確に感じるために、「予動」が重要であることは前述の通りである。さらに、手拍子のように両手で迎えに行くのではなく、楽器を持つ手は固定して演奏する手のみを動作して叩かせることも重要であろう。両手で迎えに行ってしまうと2通りのリズムが生まれてしまうためである。これはタンバリンについても同様である。

この楽器は子どもにとって日常的に扱われる傾向が強いので、いざ発表会に向かうに当たっては、このパートの担当は子どもに敬遠されがちになる。現場での保育者の子どもへの配慮も大切になってくるかも知れない。

3．　おわりに

楽器の種類が多くなればなるほど、それぞれの楽器に対応するための扱い方、演奏の仕方の種類が増えてくるので、保育者にとっては大変な労力を要するであろう。しかし正しく扱えば永く使用出来るはずの楽器も、その扱い方を間違ったり破損させるようなことがあれば、

楽器の寿命も短くなってしまい、本来の音色を出せず役割を果たせぬままに終わってしまう。楽器は「道具」であり、「玩具」ではない。子どもにしっかりとその判断と確認をさせてから扱わせたいものである。さらに大きな楽器に何かトラブルが起こるとすれば、保育者が扱っている時が多いであろう。保育者もしっかり楽器の扱い方を把握し、楽器の寿命を維持させて行きたいものである。

4．資料作成指導・協力

・植松　文雄氏（フリー打楽器奏者）
・明治学院大学吹奏楽部打楽器パートのみなさん